

(三) 赤松氏の再興と置塩城おきしお

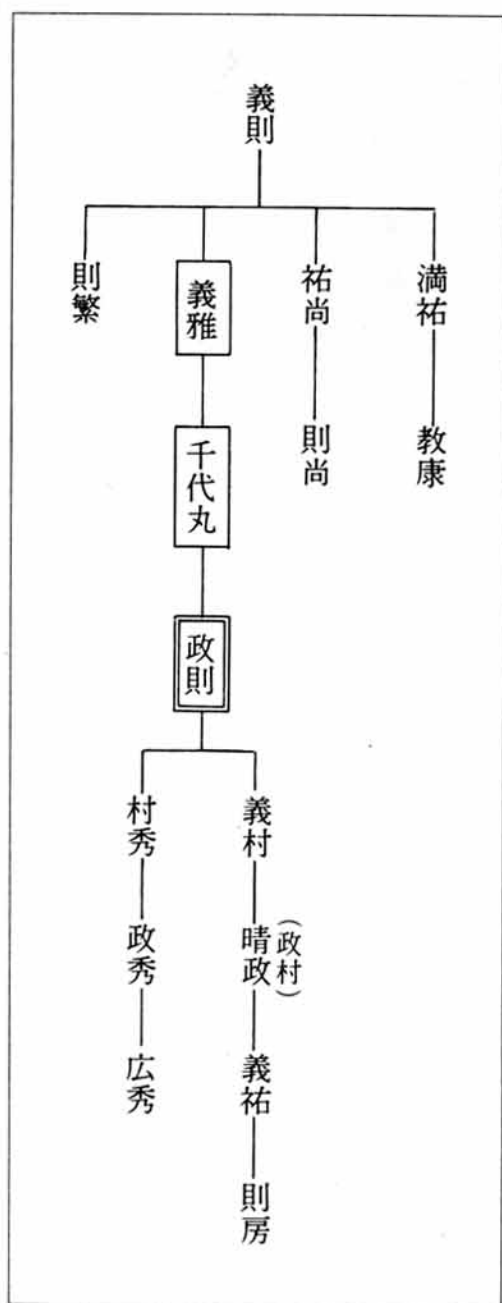
赤松政則まさのり

いちど滅ほろんだ赤松氏でしたが、政則の時代に再び勢いをもり返しました。

政則は、満祐の弟、義雅よしまさの孫にあたります。嘉吉の乱で城山城がはげしく攻められていた時、義雅はひそかに城中から脱出しました。そして、追討軍に加わっていた赤松満政じんの陣こうふくに降伏し、一人の子、千代丸を満政にたのんで陣中で

自害しました。

千代丸は、満政にかくまわれて成長しましたが、二十三才でなくなりました。その時に、一人の子供が残されました。それが法師丸、すなわち、後の赤松政則なのです。



赤松氏略系図

一四四三年（嘉吉三年）、天皇の位のしるしの一つである神璽（印）が奪われるという事件が起こりました。それは、南朝を支持する人々が、尊秀王という皇子をたてて、幕府に反抗したためでした。

一四五五年、尊秀王が神璽をかかげて吉野の奥で兵を挙げたといううわさが流れました。この時、赤松氏の残された家来たちは、赤松氏の再興が許されるのならば、神璽を取り返しましょうと、人を通して幕府に申し出ました。尊秀王の拳兵をおそれていた幕府は、赤松氏の家来たちの申し出を受け入れました。赤松氏の数人の家来たちは、吉野の奥に入りこみ、しばらく皇子に仕えていました。が、一四五七年（長禄元年）十二月に皇子を討って、神璽を取り返すのに成功しました。翌年、神璽は京都へ返り、幕府は約束どおり、法師丸に赤松家をつぐことを許し、加賀の半国の守護にしました。この時、法師丸は四才でした。

一四六二年に京都に土一揆どしつぎが起こり、それをしずめるのに幕府も困っていましたが、浦上則宗うらがみのりむねに率いられた赤松氏がすばらしい働きをして、それをしずめ、將軍義政よしまさにたいへんほめられました。その後、法師丸が、十一才で元服げんぷくする時に、義政から政の一字をもらって、政則と名乗りました。

一四六七年（応仁おうにん元年）、有名な応仁の乱が起こりました。この応仁の乱では、政則は、山名氏から領地を取り返すために、細川氏の東軍に属しました。この戦乱の間に、政則は、播磨・備前・美作のむかしの領地をほぼ取り返しました。その後も山名氏との戦いがくり返されましたが、一四八八年（長享ちやうきやう二年）、ついに書写の坂本で山名氏をうち破り、播磨・備前・美作の三国を完全に手に入れることができ、名実ともに赤松氏の再興を成しとげました。

**置塩城**　赤松氏の再興を成しとげた政則が、本城として築いたのが置塩城でした。



置 塩 城 跡 (中央の置塩山の頂上)

置塩城は、夢前川の中流のあたり、置塩小学校の北にそびえる置塩山の山頂にありました。

この山は東がとなりの山と連なっているだけで、三方とも急な斜面しゃめんになっているので、守りやすく、攻めにくい地形なのです。また、この夢前川が流れる谷では、米がたくさん取れたので、食料の心配がありませんでした。このように、置塩城はたいへん条件のよい城でした。政

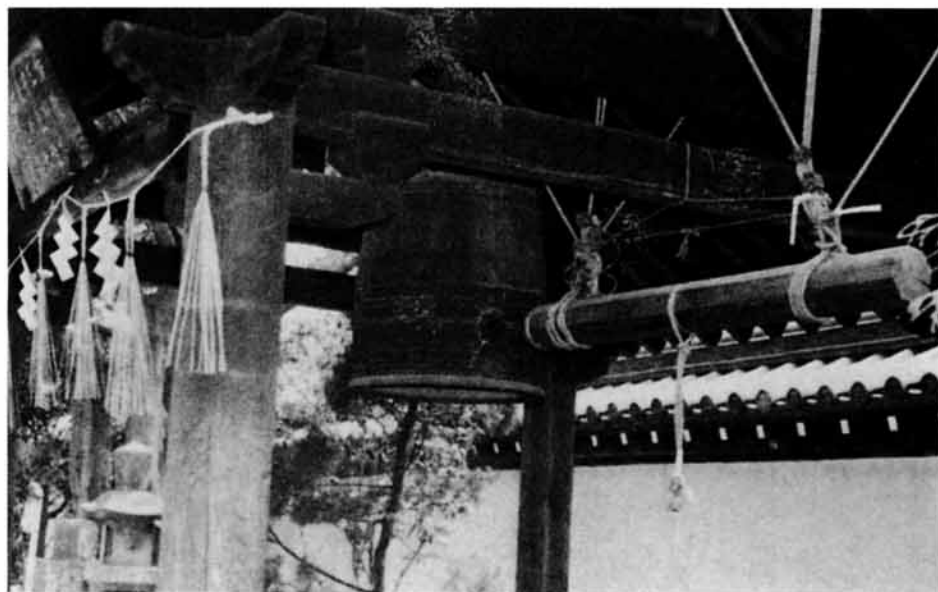
則はこの城を自分の本城とし、すでに赤松貞範が築いていた姫路城を支城として家来の小寺氏に守らせ、引き続き山名氏からむかしの領地を取り返すことに努力しました。

山名氏を播磨から追い出した後、置塩城を中心に、赤松氏はたいへん栄えました。城には、りっぱな屋根瓦がわらやぐらの櫓が次々に建ち、ふもとの城下には、武家屋敷や町家が軒のきを連ねました。また、置塩小判といわれる通貨つうかも出回るほどで、三か国の大大名として繁栄はんえいしました。

このりっぱな城も、後に豊臣秀吉とよとみひでよしが播磨を平定したときに、取りこわされて姫路城を築くのに使われたということです。

### 赤松氏の内紛ないふん

政則は、赤松氏を再興し、繁栄させましたが、四十二才でなくなりました。その跡あとをついで置塩城主になったのが、一族の赤松義村よしむらでした。姫路の総社にある形の美しいつり鐘かねは、この義村が、一五〇六年（永正えいしやう



総社のつり鐘（市指定の文化財）

三年）に領地の平和を願って寄付した  
ものです。

義村の代になると、実権は赤松氏の  
再興に活躍した浦上則宗のりむねににぎられて  
しまいました。そこで主家しゅかに忠実な浦  
上村国むらくにとの間で合戦が始まりました。

則宗の死後、跡をついだ村宗むらむねは、一  
五二一年（大永元年たいえい）、主人の赤松義村  
を室津むろつに閉じこめて、暗殺あんざつしてしま  
いました。

当時、姫路城にいた赤松氏の家来、  
小寺政隆こでらまさたかは、すでに一五一九年（永正えいしょう）



御着城跡と堀跡（堀跡は現在も一部残っている）

一六年）、御着城ごちやくじょうを築いてここを本城にし、姫路城を支城として、子の則職のりもとに守らせていました。

義村が暗殺された翌年、小寺政隆は義村の子、赤松晴政はるまさをたてて、村宗を討とうとしたので、村宗は備前の三石みついし城に逃げ帰りました。政隆は村宗を追うのをやめ、村宗の反撃はんげきに備えて、御着城が平城であるため、一五二九年（享祿二年きょうろく）、山城やまじろである豊国とよくにの庄山しょうやま城に移り、御着城と庄山城の二つの城を守ることにしました。





庄山城跡

翌一五三〇年、浦上村宗が播磨に攻めこんで来て、七月二十七日、庄山城を囲みました。政隆は必死になって戦いましたが、敵の数が多かったのでとうすることもできません。ついに、政隆はじめ一族家来数百人は、庄山の岩を血に染めて討死し、城を落とされてしまいました。しかし、政隆の跡を子の則職がつぎ、御着城を本拠として赤松氏を守り、浦上氏に対抗しました。

備前・播磨の有力者となった浦上村宗は、以前に幕府の実権をにぎって

た細川高国たかくにと組んで、天下をねらいましたが、一五三二年（享祿四年）、細川晴元と組んだ赤松晴政によって討ち滅ぼされました。晴政は十年を経て、やっと、亡なき父のあとをつぐことができようになり、置塩城に帰って来ました。家来の浦上氏によって播磨を追われた赤松氏でしたが、またまた播磨の守護に返り咲くことができました。

置塩城を本拠とする赤松氏は、晴政の後、義祐よしすけ・則房のりふさと受けつがれましたが、小寺氏・宇野氏・別所氏など、重臣の多くが独立したために、もうむかしのような勢力はありませんでした。則房は、播磨に入って来た豊臣秀吉したがに従い、阿あ波わの国（徳島県）で一万石の大名となりました。関が原の戦いでは豊臣方に味方したため、徳川家康とくがわいえやすに領地を取り上げられ、二百五十年続いた赤松氏は、ついに絶えてしまいました。